大聖寺

町屋の風景

格子戸から差し込む光、風、音。
町屋には派手さの微塵もなく、
慎ましいけれども豊かな時間と空間の
連続性を感じることができる。

町屋(町家)は京都を始めとしてまだ日本各地に残っているが、その特徴は、商人の職住兼用の住宅で、通りに面する表側の部屋は店として使われ、また通りに面してできるだけ多くの人が住めるように間口が狭く建てられている。他にも町屋の特徴は数多くあるが、その一番目は断然、格子(こうし)だろう。石川県では金沢の東茶屋街のベンガラ格子の町並みが有名で、格子が独特のリズムを作り出し、一軒の町屋だけでなく、町全体のデザインを形作っているように思える。

現在の日本の多くの町並みは、住居、商店、ビルディングのデザインにほとんど協調性がなく、それぞれが個性を主張し、町全体としてのデザインという意味では、ヨーロッパなどの町並みと比べると無残としか言い様がないけれど、江戸時代から昭和のある時期まで残っていたであろう、格子が続く町並みというのはきっと美しかったに違いない。

「家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。暑きころ、わろき住居は堪へがたき事なり。」とは、兼好法師が徒然草の第五十五段での言葉。

兼好さんがおいでた京都だけでなく、基本的に日本の夏は蒸し暑い。ということで、町屋は概ね夏を涼しく過ごせることを旨として作られている。

表から奥へと通り抜ける「通り庭(トオリニワ)」。町屋に暮らす人は夏の日の日課として表や通り庭に打ち水を行った。水分蒸発による気化熱が温度を下げ、風を作り出す。表を格子戸にし、風の通りを良くする工夫。中庭の緑に水をやれば草木が匂い立ち、目にも涼しい。

そんな風通しの良い座敷で昼寝をするのは、この上ない贅沢に思える。